

学習院大学史料館所蔵史料目録 第五号

中川善之助寄贈文書  
(下)



## 序 文

一昨年より当館所蔵史料目録の第三・四号として「中川善之助寄贈文書」の全目録と、未公刊の主として近世史料を刊行してきたが、本書はこれの最終巻をなすもので、本書によって「中川善之助寄贈文書」のうちの近世史料の刊行はすべて終了したことになる。

本書には、第四号に引き続いて仙台藩関係文書と、それに会津藩の「御法度書」を収録した。このうち、本書の大半を占めている会津藩「御法度書」は、藩祖保科正之の寛永期から容敬の文政期にいたる、家臣に対する法度(禁令)を編纂したものである。この編纂がどこで、誰の手によって行なわれたものであるかは不明であるが、これによって主として会津藩家臣の生活の様子、たとえば困窮状態などが知られて興味深い。最近、豊田武氏を監修者として『会津藩家政実紀』が刊行されつつあり、会津藩政史研究はなお一層さかんになっているが、本史料がそれに寄与するところがあれば幸いである。また、伊達邦成の「手控」は、明治初年に北海道の開拓に入った仙台藩家臣の動向を伝えるもので、これも大変興味深い史料といえよう。史料中、明治三年の有珠郡におけるアイヌの「家数人別調」などで、アイヌのことを「土人」と呼ぶような問題の箇所もあるが、これも歴史的史料として、とくにアイヌの家族構成などが知られて貴重だと思われるので収録した。諒とされたい。

なお、本書の作成には主として在原昭子、齋藤洋一、須田由美子、高澤憲治の諸氏があたった。

昭和五十五年二月二十五日

## 例言

一、本書は、昭和五十一年に令夫人中川綾子氏より学習院大学史料館に寄贈された、故中川善之助氏所蔵文書のうちの仙台藩関係史料と会津藩関係史料を収録したものである。

一、史料筆写は、通例の古文書筆写要項に従ったが、そのうちの主な点を示すと以下の通りである。

- (1) 適宜読点をつけた。
- (2) 漢字は原則として当用漢字とした。
- (3) 仮名は、而・江・さ・べ・片・片・と・しは生かし、その他は平仮名に改めた。
- (4) 誤字・あて字等は適宜（ ）で、補足・訂正した。
- (5) 闕字は一字あけ、平出・擡頭は二字あけで示した。

中川善之助寄贈文書(下) 目次

史料の部 ..... 1

一四 御法度書(会津藩) 卷一、卷二、卷三合卷

一五 御法度書(会津藩) 卷四、附録合卷

一六 御触留(仙台藩)

一八 手控(北海道開拓関係記録)

中川善之助寄贈文書解説 ..... 231

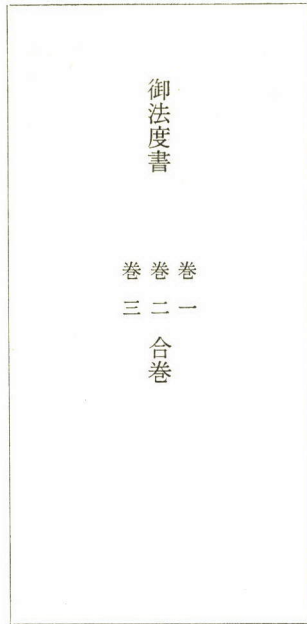


史料の部



一四 御法度書 (会津藩)

(表紙)



凡例

一 土津様以来 御代々之御制法共大經ハ雖相貫、漸々御増損も有之、数度之御令条不考合候而ハ現行之品不相分紛敷成行事ニ付、自今已後可被相用分を御議定之上改而被相載候条可得其意候事、

一 武家諸法度ハ 公儀御代替之每度被 仰渡候といへとも 蔽有院様以前之御法度并 文昭院様御代之御法

度ハ 御当代御用之品とハ少数異同有之候処、 有徳院様以来元和之御法制ニ被為随、其後御代々其通之事故 御当代天明之御法度而已被相載候事、

一 御家ニ而御家中之掟ハ 土津様 御代寛永十四年始而被 仰出、猶御潤色之上慶安万治兩度被 仰出、其後至于今万治之御定御遵行之御事ニ候へ共、其内沿革有之旧文之儘ニ而今日之御制度と対様不致品とも有之ニ付、此度改而被相定候上ハ寛永慶安万治之三令ハ此帳面へ不被相載候事、

一 御代々之御教令及数度候、後々迄も心得とすへき品ニして文長く意味深長たるハ旧文之儘ニ而初之ニ冊ニ被相載候間、役名称呼等現在之御制度と異成儀も有之条可得其意候、儉約之御教令等ハ数多有之といへとも去ル亥年改而被相定候故旧文ハ被相省候事、

一 次之ニ冊御定之条々原文之儘ニ可被相載候得共、左候而ハ文言殊ニ繁雜ニ相成而已ニ無之、其中ニ不用之事或ハ前後齟齬之品も有之紛乱到安き事故、此度御吟味有之一覧之上ニ而分り安き様取捨添削之上其要文を被相載候事、

一 御家禁御軍禁ハ不及申軍役定其外不時之節之御条目ハおのつから其品を以被行候故、此帳面へ不被相載候事、

一 公儀服忌令前条同断之事、

一 御意之事大小ともニ大形ハ此帳面ニ雖被相載、或ハ大綱を掲ケ細目を略し、或ハ役人其事を奉行する事ハ夫ニ譲り候品も儘有之事、

一 毎条其事之起れる年を肩書ニいたし、近年少々御増損之年代ニ至而ハ煩敷儀ハ相省候事、

一 臨時之命令ハ後年迄其通御遵行之事にも無之候条被相除候、仮令ハ宝曆已来御借知ニ付被相定候類ハ不被相載候事、

一 旧来之御作法何年々起れる共不知仕来之品も數多有之事  
 二 候所、品ニ寄なたれ候弊も有之事ニ候故、其類をも被相載候事、

一 公儀御定をも一々可被相載候得とも 御家之御制度ハ多分 公儀御定ノ内端ニ被立置候事故、其類は不被相載候事、

一 公儀ハ勿論 御家之御定日用之間、心得とすへき事共大

方御吟味有之事といへとも、条例之類ニ至而ハ一書之尽すへきニ無之候、此帳面を本とし常々吟味探索を加へ貴<sup>(遺)</sup>失無之様可相心得義勿論之事、

一 所々ニ被建置候高札之条々ハ諸人明らかに知ル事ニ候間此帳面へ被相除、其外指手形を出シ或ハ赤子之屍を棄候類触面ニ有之といへとも、令条を待すして心得違有之間敷筈之事故是亦不被相載候事、

一 今度新規之御議定之義ハ其趣肩書ニ相断候事、

一 旧令之内いつとなく廢せるもの、此度御再興之上古に被復候儀も有之候間可存其旨事、

一 凡而御知行高御切符高ニ隨而次第有之分ハ、当分御借知中ハ残知之割ニ隨ひ夫と違有之事ニ候処、婚葬之御定式ハ其外逆も残知全知之差別なく定被置候品も有之候間可得其意候事、

一 肩書ニ出す所或ハ年代月日断るといへとも、全く不相知或ハ年号計りを記し或ハ年月ありて日なきもまゝ有之候、或ハ江戸会津にて申渡所之月日等相出入するも有之事、

文化十四年丁丑七月七日

目録

公儀

〔一〕<sup>(朱)</sup> 一 武家諸法度、

土津様御代

〔二〕<sup>(朱)</sup> 一 御家中武具心懸之義ニ付被 仰出候事、

〔三〕<sup>(朱)</sup> 一 組頭始諸頭心得方之義ニ付被 仰出候事、

〔四〕<sup>(朱)</sup> 一 御家中武具可改旨被 仰出候事、

〔五〕<sup>(朱)</sup> 一 諸士屋敷ノ手作物売出或ハ礼物等取候儀ニ付被

仰出候事、

〔六〕<sup>(朱)</sup> 一 組頭共仲ケ間合之義ニ付被 仰出候事、

〔七〕<sup>(朱)</sup> 一 組頭共其組之馬を可見旨被 仰出候事、

〔八〕<sup>(朱)</sup> 一 風説雑談之義ニ付被 仰出候事、

〔九〕<sup>(朱)</sup> 一 侍共之者町へ出候時格好相応供可召連旨被 仰

出候事、

〔十〕<sup>(朱)</sup> 一 仲ケ間申合拝借物之義及訴訟候節被 仰出候事、

〔十一〕<sup>(朱)</sup> 一 御供番頭御小性頭(姓)小番頭支配取扱方之義ニ付被

仰出候事、

〔十二〕<sup>(朱)</sup> 一 火葬并殺産子候義ニ付被 仰出候事、

〔十三〕<sup>(朱)</sup> 一 子共(供)を無慈悲ニ育候者有之被 仰出候事、

〔十四〕<sup>(朱)</sup> 一 被下物之願申出候義ニ付被 仰出候事、

〔十五〕<sup>(朱)</sup> 一 御家中無尽之企相聞候ニ付被 仰出候事、

〔十六〕<sup>(朱)</sup> 一 儉約之義箇条を以被 仰出候事、

鳳翔院様御代

〔十七〕<sup>(朱)</sup> 一 御家督之節御家中之者へ被 仰出候事、

〔十八〕<sup>(朱)</sup> 一 御家中之士困窮ニ付訴訟を企候由達 土津様

御聽御下知之趣友松勘十郎一柳平左衛門(承力)奉之会

津御家老共へ申遣候ニ付、御家中之面々へも申

渡候事、

〔十九〕<sup>(朱)</sup> 一 組士之内金錢利倍(致)到候ニ付跡式御立被成間敷候

処、御慈悲ニ御立被下候旨被 仰出候事、

〔廿〕<sup>(朱)</sup> 一 後妻を早速娶候義ニ付御教誡被 仰出候事、

徳翁様御代

〔廿一〕<sup>(朱)</sup> 一 御入部之節御家中御領中へ被 仰出候事、

〔廿二〕<sup>(朱)</sup> 一 町奉行始諸役人心得方之儀被 仰出候事、

士常様御代

〔廿三〕<sup>(朱)</sup> 一御領中虚説之義ニ付被 仰出候事、

〔廿四〕<sup>(朱)</sup> 一御家中之面々為遊獵罷出候節心得方之義被 仰出候事、

〔三六〕<sup>(朱)</sup> 一土風之義被 仰出候事、

〔廿五〕<sup>(朱)</sup> 一大酒乱酔之義被 仰出候事、

〔廿六〕<sup>(朱)</sup> 一建馬心得方之義被 仰出候事、

卷二

〔廿七〕<sup>(朱)</sup> 一頭役心得方之義被 仰出候事、

目錄

〔廿八〕<sup>(朱)</sup> 一芸術を以被 召仕候者家業出精可相励旨被 仰出候事、

恭定様

〔廿九〕<sup>(朱)</sup> 一 番代之者多無之様被 仰出候事、

〔三十〕<sup>(朱)</sup> 一 御役訴訟之心得被 仰出候事、

〔三十一〕<sup>(朱)</sup> 一 御家老奉行差凶之品卒爾ニ及愚意候ニ付被 仰出候事、

〔三十二〕<sup>(朱)</sup> 一 學問之義孔孟程朱之学流致講習其他之教法不可 雜旨被 仰出候事、

〔三十三〕<sup>(朱)</sup> 一 士共仮初之寄合ニも困窮之咄仕候義ニ付被 仰出候事、

〔三四〕<sup>(朱)</sup> 一 江戸御屋敷御条目先制之趣御増損之上被 仰出候事、

〔四二〕<sup>(朱)</sup> 一 御改正之儀大経ニおいてハ聊義不可改旨被 仰出候事、

〔四三〕<sup>(朱)</sup> 一 町鄉村之者ハ得頼目安書之儀ニ付御家老共ハ申聞候事、

〔四四〕<sup>(朱)</sup> 一 御軍制御改被成被 仰出候事、

〔四五〕一婚葬之式被相定候節被 仰出候事、

〔四六〕一学問武芸修行之儀ニ付被 仰出候事、

〔四七〕一御政道之儀無誤致疑惑批判等ニ及候儀ニ付被

仰出候事、

〔四八〕一学問修行之儀ニ付被 仰出候事、

〔四九〕一勤之者学問修行之儀ニ付被 仰出候事、

〔五〇〕一家筋ニ無之共其器ニ当候者ハ可被召仕旨被 仰

出候事、

〔五一〕一公義御触有之候ニ付武役之面々心得方之儀御

家老共申聞候事、

〔五二〕一学校御普請成就文武修行弥可相励旨被 仰出候

事、

〔五三〕一日新館童子訓御編集被成其意を意得致候様改而

被 仰出候事、

御当代

〔五四〕一兵学修行之儀ニ付被 仰出候事、

〔五五〕一頭役之者組支配之者取扱方之儀被 仰出候事、

〔五六〕一御参府前土風之儀ニ付被 仰出候事、

〔五七〕一学問之儀程朱之学流へ被相復候節被 仰出候事、

〔五八〕一武備教練兵学修行之儀ニ付被 仰出候事、

〔五九〕一学校諸生風儀可相励旨被 仰出候事、

〔六〇〕一御目見被 仰上候節江戸御屋敷御家中之面々風

儀相励候様御箇条を以被 仰出候事、

〔六一〕一御家中之諸士へ御手当被成下土風御教誡之事、

〔六二〕一御家中儉約之制被 仰出候事、

〔六三〕一江戸御屋敷内儉約之義ニ付被 仰出候事、

〔六四〕一御入部之節御家中御領中へ被 仰出候事、

〔六五〕一御軍役之儀ニ付被 仰出候事、

以上

卷三

目錄

〔六六〕一諸士諸奉公人之御作法、

〔六七〕一継目或は嫡子養子等之儀ニ付御作法、

〔六八〕一武備之儀ニ付御定、

〔六九〕一学校文武之修行ニ付御定、

〔七〇〕一家中物成并諸渡物或ハ居役金小普請料之御定、

〔七一〕一建馬之御定、

〔七二〕一御城中御規式御定、

〔七三〕一御礼申上候節差上物之御定、

〔七四〕一御祝儀申上或ハ御機嫌伺之御作法、

〔七五〕一御通行之節之御作法、

〔七六〕一御城中之御作法、

〔七八〕一郭門出入御作法、

〔七九〕一公儀御手前御日柄御用地向謡鳴物停止之御定、

〔八〇〕一御家訓并御掟書并御軍令拝聴御定、

〔八一〕一撰挙御定、

〔八二〕一夜居之間并会所ニテ御家老共ヨリ御用承知或ハ

申達候節之御作法、

附、宅々へ申達候次第、

〔八三〕一御礼御受等勤方之御定、

〔八四〕一神文之御定、

〔八五〕一御家老共へ諸士謁候御定、

〔八六〕一御勘氣者并御穿鑿人之義ニ付御作法、

〔八七〕一赦願之心得方、

以上

〔一〕公儀武家諸法度

一文武忠孝を励し可正礼儀事、

一參勤交替之義每歳守所定之時節、從者之員數不可及繁多

事、

一人馬兵具等分限に應し可相嗜事、

一新規之城郭構營堅禁於居城之湮壘石壁等破壞之時は達奉

行所可受差図也、櫓屏門以下ハ如先規可修補事、

一企新規結徒党成誓約并私之関所新法之津留制禁事、

一江戸并何国にても不慮之義有之候と言とも猥に不可駈集

在国之輩は其所を守り下知を相待へく也、何所にて雖行

刑罰役者之外不可出向可任檢使之左右事、

一喧嘩口論可加謹慎私之爭論制禁之、若無抛子細有之ハ達

奉行所可受其旨、不依何事令荷担者其咎本人ハ重かるへ

し、并本主之障有之者不可相拘事、

附、頭有之輩百性訴訟其支配へ令談合可濟之、有滞義

(姓)

ハ評定所へ差出可受捌事、

一 国主城主壱万石以上近習并諸奉行諸物頭私不可結婚姻、

惣而公家も於結縁辺は達奉行所可受差凶事、

一 音信贈答嫁娶之規式或は饗応或ハ家宅宮作等其外万事可

用俟約、惣而無益之道具を好ミ不可致私之奢事、

一 衣裳之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免

許之事、

附、徒若兜之衣類ハ羽二重絹紬布木綿、弓鉄砲之者ハ

紬布木綿、其外ニ至りてハ万に布木綿可用事、

一 乘輿は一門之歷々国主城主壱万石以上并国大名之息城主

及侍従以上之嫡子、或ハ年五十以上許、儒医諸出家ハ制

外之事、

一 養子は同性相応之者を撰ミ、若無之においてハ由緒を正

し存生之内ニ可致言上、五十以上十七歳以下之輩及末期

雖致養子吟味之上可立之、仮令雖実子筋目違たる義不可

立事、

附、殉死之義弥令制禁事、

一 知行之所務清廉沙汰之、国郡不可令衰弊、道路駄馬橋舟

等無断絶可令往還事、

附、荷船之外大船は如先規停止之事、

一 諸国散在之寺社領、從古至于今所附來は不可取放は勿論、

新地之寺社建立弥令停止之、若無抛子細有之ハ達奉行所

可受差凶事、

一 万事江戸之法度ニ応し国々所々ニにおいて可遵行事、

右条々堅可相守者也、

天保七年丁未九月廿一日

〔二〕土津様御代御家中武具心懸之義ニ付被 仰出候事、

諸侍共兼而度々被 仰含候儀ニ候間、定而武具馬具等ハ分

量相応ニ可相嗜候得共必小道具共を調不申物ニ候、大抵道

具を調候ても其外細々之道具ハ安き事ニ候故油断致、只今

打起候時儀(宜)に何角行当物ニ候、常々組頭は組之者ニ諸道具

沙汰候様ニ内々催促可致候、少々ハ武具馬具を組頭内々ニ

而見候而も尤ニ候得共、今程左様之義を仕候ハ、世間之沙

汰を可致候得ハ左程ニハ不入事ニ候、不足之道具を無油断

心懸候様ニ可申付、此趣ハ其組中ニ親類敷近き人ニ様子具

ニ申伝候ハ、脇々ニ而も承心懸を可致候条、八人之組頭江此段可申渡旨被 仰出候事、

正保二年乙酉四月八日

〔三〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代組頭始諸頭心得方之儀被 仰出候事、

組頭物頭諸頭共大<sup>(第九)</sup> 御為を肝要ニ可存事ニ候、我預之役をは常々我物ニ存候様ニ朝夕心ニ入候ハ、悪敷義ハ有間敷候、  
 仮令は何様之義を被 仰付候共是ハ如何と存候得は被 仰付次第と存かたつりに物を心得候故、悪敷かたつりて申渡候間、組中も <sup>(ママ)</sup> さまに心得候事皆々頭衆不合点故ニ候、

言葉ハ如何様にもあれ心を能請而差引仕候ハ、悪敷儀ハ有間敷候、自然是ハ如何と存寄候ハ、ひそかに談合前々保科民部へ申候而僉儀可仕候、組頭衆ハおとなしき心持肝要ニ候旨被 仰出候事、

慶安二年己丑三月

〔四〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代御家中武具可改旨被 仰出候事、

家中之武具馬具組頭常々心懸、忝人々々之前を細々に改而

不足之所を可為仕候、乍然物様を只一度に存候ハ、世間之沙汰も亦如何に候間、忝人ツ、のを不絶改る義專要ニ候、  
 俄之時不足之事諸品共ニ於有之ハ其組頭之可為越度候、物頭共も武道具一度請取封を付置候と計心濟ニ存候ハ、虫喰ハ広狭長短をも存間敷候、折々矢倉へ参り他へ不見様人々へ為着見て、能比をハ其名を書付、俄之時ハ書付次第ニ着せて指物ハ差出候様常々心懸可申候、乍去俄二人ニ左様仕候ハ、世間も如何ニ候間、折々目立候はぬ様に矢倉へ参り戸をもさし我組々之者ニ申付、必々常々嗜肝要ニ 思召候間、追々頭々手元ニ而吟味致候様被 仰出候事、

慶安二年己丑三月廿日

〔五〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代諸土屋敷手作物売出或ハ礼物等取候儀ニ付被 仰出候事、

風俗流弊ニ而侍屋敷手作物売出、或ハ極月ニ至り町家へ罷出候者も間々有之、或ハ物頭之内ニ而同心之方節句為礼菜大根つれを取候、是ハ又も不苦候得共自然代物を取者も有之由沙汰之限り成事共ニ候、少々菜大根つれも不入事

共ニ候と 御意被遊候段、保科民部平日之物語ニ咄風俗可相励由被 仰出候事、

慶安二年己丑三月廿日

〔六〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代組頭共仲ケ間合之儀ニ付被 仰出候事、

組頭衆仲ケ間之儀万事御為所之儀ニ候間、互ニ無心置每事打とけて心を不残和らかに相談仕候様ニ常々之心得肝要ニ候、我々ニ而は御用も調間敷候、其品々北原采女常々心懸候様ニとの御事ニ候、

慶安二年己丑十一月

〔七〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代組頭共其組之馬を可見旨被 仰出候事、

組頭衆ハ年中ニ二度程ツ、何れの馬場なり共最寄次第ニ罷出、五疋七疋ツ、も折々組之衆之馬を自身ニ為乗見可申候、老人或ハ病者之義は格別ニ候、若者は常々自身ニ乗相嗜候様可仕旨被 仰出候事、

慶安二年己丑十二月七日

〔八〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代風説雑談之義ニ付被 仰出候事、

諸侍共傍輩之噂ニ罷り候風説或ハ不実之雑説致候儀可相慎候、就中 御城御番所において無作としたる雑談不致様兼而組頭共御番所へ寄合候刻能々可申論旨被 仰出候事、

慶安四年辛卯十二月十七日

〔九〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代侍分之者町江出候時格好相応ニ供可召連旨被 仰出候事、

侍分之者用事有之町江出候時は、其身上格好相応ニ供を召連可罷出候、縦ハ知行高之者小者一僕之体ニ而出候儀ハ不入事ニ候、少しも宜者ハ道具等を為持出候而尤ニ候、人々町へハ用所有之物ニ候間出候儀無用之 思召ニハ無之旨被 仰出候事、

承応元年壬辰六月朔日

〔十〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代仲ケ間申合拜借金之儀及訴訟候節被 仰

出候事、

此度身体不成者共記証文を書仲ケ間として中合候段、其節<sup>(起請)</sup>

心ニ不覺徒党之様相聞候、然共少も左様之心底ニ而ハ無之  
 身体不成段迷惑成儘ニ可致と 思召候ニ付而、此度之者共  
 儀拝借被 仰付候、自今以後拝借金之義申上候共御取揚被  
 成間敷候間取次仕間敷候、惣而不依何品申合起証文抔於仕  
 候は無御取揚却而曲事ニ可被 仰付候間、此趣就中組頭共  
 ニ懇ニ申渡以來之義堅無用ニ可仕由被 仰出候事、

万治三年庚子十一月十七日

〔十一〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代御供番頭御小性頭小番頭支配取扱方之

義ニ付被 仰出候事、

一組中之儀万事無私致差引猥リニ不可令他出、奉公不奉公  
 之段無遠慮可申上事、

一組中之訴訟於道理有之は急度可申上事、

一理不尽之輩有之は急度可申上事、

右条々堅可相守、若於最<sup>(ヤ)</sup> 中忘公儀は可為越度者也、

寛文三年癸卯七月十日

〔十二〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代火葬并産子を殺候義ニ付被 仰出候事、

火葬ハ不孝、産子を殺候は不慈ニ候処、風俗ニ相成諸人共  
 行有之処、只今急度御法度ニ被 仰付候ニ而ハ無之候へ共、  
 頭々之者不限此度平日火葬之不孝成事、産子を殺候ハ不慈  
 成事を下々へ折々無油断委細ニ可申教候、其中ニ教を不聞  
 入者候ハ、殿様殊之外御嫌被成候間、達 御耳候ハ、  
 不可然事之由弥可申聞候、左候ハ、次第ニ火葬も可相止と  
 思召候、尤葬送之規式を美々敷致分外ニ厚致葬可然と  
 思召候義ニ而ハ全無之候、先ツ火葬ニさへ不致候へハ能事  
 と 思召候、依之 御主意之御書付左之通被遣候、頭立候  
 者へ為見可申旨被 仰出候事、

一 火葬ハ甚為不孝之儀能教可申事、

一 下々殺産子候事甚為不慈候条、是亦能教可申候事、

寛文三年癸卯七月廿五日

〔十三〕<sup>(朱)</sup> 土津様御代子供を無慈悲ニ育候者有之被 仰出候

事、

組附吉田次郎左衛門草履取長蔵と申者、御勘定頭野村喜惣  
 兵衛悴宇兵衛と付合居候処、組付黒河内彦右衛門悴又市郎

儀右宇兵衛<sup>(一)</sup> 長藏を討立退候企有之哉ニ長藏承之、已故ニ若輩之宇兵衛を為討候事を無念ニ存し、於本二丁又市郎を討候処、 土津様御下知ニ長藏義已故ニ宇兵衛を為討候

而は無念ニ存又市郎を討候段、此上之仕方ニハ尤之儀ニ候、彼又市郎義ハ日来不作法其上草履取風情之者ニ見苦敷被討候段、此者之死骸をハ諸人為令見晒候而も可然程ニ 思召

候、長藏義ハ常々御助可被成程ニ 思召候得共、元之違たる義ニ候条討首ニ致、勿論死骸を様し首晒候ニ不及旨被仰出候、其親々へ左之通被 仰出候段御家中之面々へ為申

聞候様御下知之事、

一 黒河内彦右衛門義悴又市郎日来不作法之儀有之候をも無構差置、子を殺候様ニ仕なし候儀子に無慈悲なる者ニ 思召候間閉門可申付候、

一 野村喜惣兵衛儀若輩之悴草履取風情之者と付合候をも不存、是亦子を捨候様ニむさと育候義無慈悲成者ニ 思召候間閉門申付可差置候、

一 右彦右衛門喜惣兵衛義悴不作法有之をも無構子を捨候様ニ致候義、子ニ無慈悲成者ニ 思召候ニ付閉門被 仰付

候間、右之旨御家中之面々へ可申聞候、子を持候者ハ常々無油断子之教育可仕旨被 仰出候事、

寛文五年乙巳三月五日

「<sup>(朱)</sup>十五力」土津様御代御家中無尽之企相聞候ニ付被 仰出候事、

侍共無尽之企仕候由粗達 御耳ニ候、兼而御法度ニ被 仰出たる儀ニハ無之候得共心法見苦事ニ被 思召候、百性町<sup>(姓)</sup>人小者中間杯之作法之様ニ可有之候、常々致儉約一分之見

苦敷ハ不苦候、侍に不似合仕方ハ縦及餓死候とも有之間敷儀ニ候、右之趣田中三郎兵衛相心得八組之組頭方へ申渡内証ニ而無尽相止候様にと被 思召候、御近習之面々成瀬主

計心得可申渡、右之外従会所申渡筋有之は自然内証ニ而可申聞旨被 仰出候事、 寛文七年丁未二月十日

「<sup>(朱)</sup>十四力」土津様御代被下物之願申出候義ニ付被 仰出候事、惣而無筋被下物杯之訴訟仕者有之様ニ 思召候、自然左様